

## 『鷲林拾葉鈔』と『轍塵抄』

— 関東天台の学僧における学問の形成 —

渡辺麻里子

室町期、天台宗の談義所では、談義（講義）によって学問が行われ、談義の筆録など多くの文献が残された（談義書と仮称す）。談義書は、従来の研究では「直談抄」という名で一括りにされてきたが、実際には個々に性質が異なるものである。<sup>(1)</sup>

談義の対象は、宗旨や経論などの多岐に渡るが、本稿では、『法華経』の談義書である尊舜著『鷲林拾葉鈔』（永正九年（一五二二）成立、十卷十冊<sup>(2)</sup>）と、実海著『轍塵抄』（大永六年（一五二六）成立、十卷十冊）について考察する。

## 一、尊舜と実海

『鷲林拾葉鈔』の著者尊舜は、宝徳三年（一四五二）に生まれ、永正十一年（一五一四）に六十四歳で没した。『鷲林拾葉鈔』は六十二歳の著作で、尊舜の学問の集大成でもある。尊舜は、常陸国友部出身で、同国中郡月山寺で尊叡に学び、信濃国津金寺の学頭を経て、明応年間には月山寺四世、のち常

陸国黒子千妙寺八世となった。『鷲林拾葉鈔』以外にも、『津金寺名目』『二帖御抄見聞』『文句略大綱私見聞』など、多くの述作を著した。尊舜は、恵心杉生流の学僧だが、賢慶から檀那流も受けるなど、多くの学匠に師事している。<sup>(3)</sup>

一方『轍塵抄』の著者実海は、文安三年（一四四六）に生まれ、天文二年（一五三三）に八十八歳で没した。武蔵国川崎出身で、武蔵国仙波仏蔵坊北院に住し、多くの談義を行った。尊舜同様著書も多く、『夷希抄』・『塩味集見聞』・『続綱目抄』・『法華玄義略大綱私』・『訳和和歌集』などが有名である。太田道灌の帰依を受け、和歌もよくした。

尊舜と実海は、活動拠点は異なるが、深い繋がりを持っていた。例えば、叡山文庫生源寺蔵『問要賢林』奥書には、隆海・慶運・賢慶の談を、尊舜が聞書したと記される。隆海は、仙波仏蔵坊北院の学頭で、実海の師である。隆海を介する両者の交流が想定される。

次に、それぞれの著作に注目すると、西教寺正教蔵『玄義

## 『鷲林拾葉鈔』と『轍塵抄』（渡 辺）

100

私見聞』（尊舜著、別名『玄義私類聚』）には、しばしば「実海抄」という引用が見られる。<sup>(4)</sup>一方の実海の著作にも、尊舜の言辞が引用される。例えば、『轍塵抄』六・五百弟子授記品「酒事」では、「尋云<sup>尊舜</sup>、經文ノ次第ハ至親友家ニ酔レ酒而臥ト説ケリ。（中略）至親友家トハ結縁ノ時節ト覺タリ。仍テ法譬不レ齊也。如何。答<sup>実海</sup>、任ニ妙楽大師ノ指南ニ、証ニ經文ヲ、非ニ法譬不齊ニ覺タリ。」と、尊舜の疑義に対し、実海が答える問答が記される。尊舜と実海は、同じ師を介するいわば門人の関係もあり、お互いの教説を引用し合う間柄であった。

さらに二人の緊密さを示すのが、実海の記した『鷲林拾葉鈔』序文である。<sup>(5)</sup>

夫レ一乗ノ終教ハ十号之極唱ナリ焉。竺乾ノ三藏争ッテツツ、震旦ノ諸師、競<sup>キョウツツ</sup>開ク講肆ヲ矣。於レ中ニ逍遙園ノ翻訳、独リ行ハレ于天下ニ、瓦官寺ノ解釈、特<sup>コトニ</sup>布ク海内ニ也。巴<sup>マカ</sup>近世柯山ノ倫師平礪昇公、冠<sup>カワリ</sup>于科文ヲ。写<sup>ウツニスル</sup>ニ於法解ヲ也。巴<sup>マカ</sup>不<sup>マカ</sup>レ出<sup>マカ</sup>三<sup>マカ</sup>玄文、与<sup>マカ</sup>ニ<sup>マカ</sup>疏ト記、有<sup>マカ</sup>ニ<sup>マカ</sup>弄引<sup>マカ</sup>有<sup>マカ</sup>ニ<sup>マカ</sup>指南<sup>ナンズレン</sup>。何<sup>ナニ</sup>為迷<sup>マカ</sup>于現文ニ哉、然<sup>マカ</sup>ドモ世及<sup>マカ</sup>ニ澆漓ニ、根性稍魯鈍ナリ。或ハ迷<sup>マカ</sup>テ文章ニ而失<sup>マカ</sup>ニ義味ヲ、或ハ疎<sup>マカ</sup>ニテ師承ニ亦耻<sup>マカ</sup>三<sup>マカ</sup>下問<sup>マカ</sup>、噫<sup>マカ</sup>悲<sup>マカ</sup>シヒ哉。余懸<sup>マカ</sup>テ茲<sup>マカ</sup>ニ、廻<sup>マカ</sup>ニ<sup>マカ</sup>愚慮<sup>マカ</sup>ヲ、欲<sup>マカ</sup>下<sup>マカ</sup>抄<sup>マカ</sup>ニ出<sup>マカ</sup>シテ以<sup>マカ</sup>テ示<sup>マカ</sup>中<sup>マカ</sup>ト来<sup>マカ</sup>葉<sup>マカ</sup>ト、方<sup>マカ</sup>振<sup>マカ</sup>フ短筆ヲ。粵友人亮尊<sup>アツメテ</sup>鳩<sup>フン</sup>ニ旧聞<sup>マカ</sup>ニ為<sup>マカ</sup>ニ新書ト、名<sup>マカ</sup>テ曰<sup>マカ</sup>フ鷲林拾葉集ト。以<sup>マカ</sup>テ之<sup>マカ</sup>ヲ呈<sup>マカ</sup>ニ余ニ。熟<sup>マカ</sup>ク<sup>マカ</sup>閱<sup>マカ</sup>レ之<sup>マカ</sup>ヲ尽<sup>マカ</sup>レ義ヲ矣。又<sup>マカ</sup>尽<sup>マカ</sup>レ善矣。余又<sup>マカ</sup>述<sup>マカ</sup>レ何<sup>マカ</sup>ヲカ乎。則<sup>マカ</sup>抛<sup>マカ</sup>ニ却<sup>マカ</sup>毛錐<sup>マカ</sup>ヲ、拱<sup>マカ</sup>レ手<sup>マカ</sup>而息<sup>マカ</sup>云<sup>マカ</sup>尔。

まずインド・中国と熱心に学ばれ継承されてきた仏の教え

が、今の乱れた世に至って、魯鈍で向学心が欠如した僧侶たちに継承されていないことを嘆く。そこで実海自身が後進のために『法華経』の注釈を執筆していたところ、友人亮尊（尊舜の改名した名）が、『鷲林拾葉集』を見せてくれた。見ると、義も善も尽くされていて、自分にはこれ以上すべき事はない。感嘆するばかりであると讃辞を述べている。執筆動機となる、今の世に法が伝わっていないという危機感と、だからこそ今後進のために著作を残さねばならないという使命感は、両者に共通する意識であったであろう。

しかし『鷲林拾葉鈔』を見て、これ以上のものは出来ないで自身の執筆は辞めたと述べた実海は、十六年後の大永六年（一五二六序文は永正七年（一五二〇））に、改めて自身による『法華経』注釈書、『轍塵抄』を著すことになるのである。

## 二、共通する学問

『轍塵抄』（十卷十冊<sup>(6)</sup>）は、『法華経』二十八品につき、文々句々にインド・中国・日本の経論・章疏を駆使しつつ注釈を施す。証拠として引用するものは、例えば、『無量寿経』『悲花経』『首楞嚴経』『金光明経』『涅槃経』『俱舍論』『大智度論』『菩提心論』『肇論』『法華文句』『法華玄義』『摩訶止観』『法華文句記』『法華玄義釈籤』『止観輔行伝弘決』『金鉤論』『山王院釈』『五大院先徳』『恵心御釈』『檀那先徳』『都率先

徳」「惠光房抄」「蓮実房口伝」「東陽口伝」「杉生御義」「証真云」「衣内抄」「法皇御抄」「外勘抄」等々である。これらは『鷲林拾葉鈔』に用いられるものとはほぼ同様である。共通するのは当然で、『法華経』の談義に際して用いる典拠は、学問の伝統の中で決まっているからである。仏の教えが継承されていけないことを嘆く学僧としては、むしろ忠実に継承しようとするに努めているのである。これらの典拠は、談義の場において伝授されてきた学問そのものである。ただしその中でも、尊舜が用いず実海が用いた書である、『衣内抄』『法皇御抄』『外勘抄』などの書物群は、『轍塵抄』の成立を考察する上で注目される（後述）。

また『轍塵抄』に典拠名が挙がっていない書についても考えてみたい。例えば『三百帖』（永心撰）である。『三百帖』は、論義（問要）の書で、約三百条の論題についての問答を記したものである。実海と『三百帖』には深い関わりがある。叡山文庫天海蔵『三百帖』の奥書には、「於武州仙波星野山仏蔵院写模訖。天台伝灯沙門実海（俗年五十五）」と記され、日光天海蔵『三百帖』の奥書には、「大永四年以仙波実海本」とある。さらに実海が『三百帖』に注釈を施した『三百帖見聞』（日光天海蔵）が存する。実海は、『三百帖』を書写した上に、注釈をも施しているのである。

尊舜も、自著にしばしば『三百帖』を用いている。例えば、

『鷲林拾葉鈔』と『轍塵抄』（渡 辺）

『鷲林拾葉鈔』葉草喩品には、「一、各有差別ノ事、如三百帖<sup>1)</sup>。当流、一義ニハ、今経ノ意ハ各有差別ノ当体即チ無差別譬也。」等と述べる。この議論は、叡山文庫無動寺蔵『三百帖』三に、「問、経文而諸草木、各有差別<sup>2)</sup>。爾者心ハ有差別譬無差別譬中ニハ何耶。答、無差別譬ノ文段也ト釈セリ。爾也。」と記される。『轍塵抄』では、『三百帖』の書名こそ記さないが、「譬レ之ニ時、拳<sup>3)</sup>葉草<sup>4)</sup>見<sup>5)</sup>レハ此草木<sup>6)</sup>一<sup>7)</sup>地一<sup>8)</sup>雨ノ所生<sup>9)</sup>ナリ。一<sup>10)</sup>地一<sup>11)</sup>雨<sup>12)</sup>処<sup>13)</sup>千<sup>14)</sup>草<sup>15)</sup>万<sup>16)</sup>木<sup>17)</sup>種子<sup>18)</sup>カ本有<sup>19)</sup>ト備<sup>20)</sup>テ平等<sup>21)</sup>無<sup>22)</sup>ナリ差別<sup>23)</sup>。」等と論じている。『三百帖』は、実海と尊舜に共通する学識の一つであったと言えよう。先に尾上寛仲氏が、『三百帖』は「談義所の必読の書」であったと推定されているが、<sup>(8)</sup>実海や尊舜の『三百帖』の引用は、その推論に対する証左となる可能性がある。

こうした文献以外にも、共通性が見られる。尊舜は、恵心・檀那両流に精通すると言われるが、恵心・檀那の異義を説く言辞は、ほぼ同じ文章が『轍塵抄』にも見られる。尊舜が神本仏迹説を説く一節は、実海の『轍塵抄』にも、『鷲林拾葉鈔』に先行する叡海著『一乗拾玉抄』にも見られる。<sup>(9)</sup>こうした言説まで、談義所で談義継承される学問とされていた可能性もあるだろう。

尊舜と実海には、学問の内容に留まらず、典拠に対する態度にも共通する態度が見られる。例えば、『鷲林拾葉鈔』では、例えば、羅睺羅の所生について「但一説<sup>10)</sup>胎生子無。化

生子有云也。此時、彼優婆塞、瞿夷夫人子歟。是世間通途ノ案推ノ義也。無シ証拠。」（序品）などとして、通行する説を紹介しつつ、明確な典拠がないことを明記する。こうした証拠の有無を問う態度は、実海にも、より顕著に見られる。例えば『轍塵抄』序品、『法華経』の翻訳の種類についての記事中で、筆者が謝靈運である説について「未レ見ニ慥ナル説ヲ。」として確かな証拠がないことに言及する。これは後代の『法華経』の注釈書である『法華経直談抄』（一五四六年以前成立）が、筆者謝靈運説をためらいなく述べることと対照的である。こうした典拠の有無など厳密であろうとする真摯な態度は二人に共通している。

さて、ここまで尊舜と実海の共通性を考察してきた。最後に、実海が『鷲林拾葉鈔』を讚歎しつつ、改めて自身で『法華経』の注釈書を著したことについて考えたい。

### 三、『轍塵抄』の志向

まず『轍塵抄』の奥書を確認しておく。

予累年有『法華経訓読之志』、雖集諸抄、無恰好之義。依之濃州勸学院衣内抄柏原成菩提院慶舜法印ノ筆所持之由、伝聞所望遂ニ写功<sup>ヲ</sup>。当此品料理之法門<sup>ニ</sup>、被裁紙面<sup>ニ</sup>。然而<sup>仙敬</sup>当法藏書納之本<sup>ニ</sup>撰<sup>シ</sup>畢。兩本遂ニ交合<sup>シ</sup>、書<sup>ニ</sup>加此私抄中<sup>ニ</sup>畢。天台沙門実海長年「法華経訓読之志」があつて諸抄を集めたがまだ十分

ではなく、濃州勸学院の柏原成菩提院の慶舜法印の筆になる『衣内抄』を所望し、遂に写功を遂げた、とある。実海の『轍塵抄』執筆の動機、「法華経訓読之志」の訓読とは、尊舜の定義によれば、経論の証拠を引きながら、文々句々を詳しく解釈することである<sup>(10)</sup>。そのためには、多くの経論・章疏が必要件となり、ふさわしい文献の入手に腐心することになる。慶舜は、談義所で著名な柏原成菩提院の二世学頭であり、実海は、『衣内抄』を求めべき書だと考えたのである。『衣内抄』は尊舜の著書には引用されておらず、実海がこだわった理由が看取される。他に『法皇御抄』も、『鷲林拾葉鈔』では用いられていないが、実海が重要と判断して加えられた文献である。権威ある諸書を入手したことで、実海はより厳密な、『訓読』による『法華経』の注釈を施す意義を見出したのであろう。

逆に、尊舜が用いて実海が排除したものには、『鷲林拾葉鈔』特有の例証である、俚諺（巷間の諺）、典拠が定かでない和歌・連歌などがある。和歌は実海も用いるが、実海の場合は、勅撰集の釈教歌と慈円や藤原俊成等の和歌に限られている。ここにも典拠を厳しく厳選する実海の姿勢が見える。

粗々ながら、『鷲林拾葉鈔』とは異なる、自分なりの新しい『法華経』注釈を試みた実海の営為について検討した。当然、『法華経』注釈に必要な基礎的な部分は、共通の基盤で

ある伝統的な学問の上にある。その上で『鷲林拾葉鈔』にな  
いものを加え、ふさわしい例証を選別しながら、より厳密な  
注釈を試みたと考えられる。

談義書は、決して一様なものではない。今後さらに個別の  
検討を行うことによつて、関東天台の談義所における学問の  
形成を明らかにしていきたいと考えている。

- 1 拙稿「法華経注釈書の位相」(『仏教文学』二四、二〇〇〇年  
三月)、「談義書(直談抄)の位相」(『中世文学』四七、二〇〇  
二年六月)参照。
- 2 勝呂信静「法華経注釈の動向」中、「尊舜の法華文句略大綱私  
見聞」(『中世法華仏教の展開』平楽寺書店、一九七四年)、八木  
昊恵「尊舜の法華経鷲林拾葉鈔について」(『印度学仏教学研究』  
一九一―)参照。
- 3 尊舜については、永井義憲『鷲林拾葉鈔』―その撰者と文学―  
(『大妻国文』二五、一九九四年三月)、拙稿「尊舜の学系」(『天  
台学报』四四、二〇〇二年一月)参照。
- 4 例えば、西教寺正教蔵『玄義私見聞』上・卷一に、「(実海抄)  
一、三大部、講談次第、三種、不同有之、如何。」などと見られ  
る。
- 5 本文は日光天海蔵『鷲林拾葉鈔』。返り点送仮名は適宜改めた。
- 6 日光天海蔵に三本(含、実海自筆本)、叡山文庫天海蔵、浅草  
寺蔵、高野山大学図書館三宝山寄託の、六本の写本が確認され  
る。未翻刻。拙稿(注1)付表参照。
- 7 『鷲林拾葉鈔』には「委如三百帖沙汰。」(序品「羅睺羅事」)、

『鷲林拾葉鈔』と『轍塵抄』(渡 辺)

「二序品放光限三東方一歟巨三諸方一歟、三百帖、論義也。」(序品)  
等、『文句略大綱私見聞』にも、「四読混和事、如三百帖見聞  
一也。」(卷四提婆品)等、例は多い。いずれも『三百帖』に記さ  
れる。

- 8 尾上寛伸「三百帖について」(『印度学仏教学研究』十七―二  
参照)。
- 9 拙稿「尊舜の神本仏迹説について」(『説話文学研究』三八、二  
〇〇三年六月)参照。
- 10 拙稿「(直談)の位相」(『天台学报』四三、二〇〇一年一月)  
参照。

〈キーワード〉 鷲林拾葉鈔、轍塵抄、尊舜、実海、三百帖

(千葉大学非常勤講師)